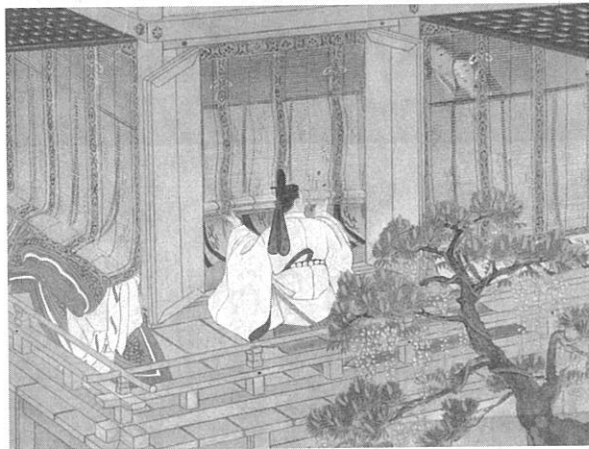


『源氏物語』と絵と筆跡と……………	永井和子……………1
源氏物語講演	
源氏物語と「朧月夜」……………	土方洋一……………4
御堂関白集……………	平野由紀子……………11
——紫式部の不在——	
研究	
蜻蛉巻の時間をめぐって……………	林 悠子……………19
「紫の上」という呼称……………	鶴飼祐江……………32
——「紫」に込められたもの——	
源氏物語講座	
蜻蛉巻の宮の君……………	三角洋一……………86
源氏物語研究文献目録——平成22年分——	村井利彦……………93
研究余滴	
紫式部の恋……………	加納重文……………44

紫式部日記の語法存疑……………	室伏信助……………49
落葉を拾う……………	高田祐彦……………53
「けぶりのさがのうれはしさ」……………	辛島正雄……………57
——『御津の浜松』最終巻読解考——	
六条御息所の歌ことば……………	鈴木裕子……………62
——「山の井の水もことわりに」考——	
源氏絵に描かれた唐物……………	河添房江……………66
——末摘花の「黒貂の皮衣」——	
源氏物語の「なりのぼる・なりあがる」……………	日野資純……………70
——今昔物語集「成上ル」との関連——	
清少納言と源経房……………	関口 力……………75
特別寄稿	
続松尾聰先生の古典遊び……………	永井和子……………79
紫式部学会だより……………	111

## 源氏物語と「朧月夜」

土方 洋 一



文部省唱歌「朧月夜」(高野辰之作詞、岡野貞一作曲)は、歌詞も旋律もとて美しい曲で、今でも広く愛唱されている。

菜の花畑に入り日薄れ 見わたす山の端かすみ深し

春風そよ吹く空を見れば 夕月かかりてにほひ淡し (文部省唱歌「朧月夜」)

「朧月夜」は、いうまでもなく「雲や水蒸気などにより」ほうつと霞んだ月のこと。日本人は伝統的に「朧ろに霞んだ月」を美しいものとして眺める習慣を持つており、「朧月夜」ということばも、古くから歌に詠まれてきたに違いないと、私たちは何となく思いこんでいる。筆者も実はそうだった。

ところが、改めて調べてみると、「朧ろな月」を詠んだ歌は、『万葉集』にはない。三代集の時代までの平安和歌にも殆どない(「おぼろけならず」ということばを導くための序として「月」を詠み込む例はある)。

たとえば『古今和歌集』では、月を詠んだ歌の代表的なものは次のような歌である。

1 木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり

(秋上184「題知らず 読み人知らず」)

2 白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の  
月 (秋上191「同」)

3 さ夜中と夜はふけぬらし雁が音のきこゆる空に月わ  
たる見ゆ (秋上192「同」)

4 月見ればちぢにもこのそ悲しけれわが身ひとつの秋  
にはあらねど (同193「是貞の親王の家の歌合によめる 大江千里」)

5 ひさかたの月の桂も秋はなほもみぢすればや照りま  
さるらむ (同194「壬生忠岑」)

6 秋の夜の月の光し明かければくらぶの山も越えぬべ  
らなり (同195「月をよめる 在原元方」)

7 秋の月山辺さやかに照らせるは落つる紅葉の数を  
見よと (秋下289「題知らず 読み人知らず」)

歌句だけからはどのような月かわからない3のような例もあるが、2・5・6・7などは明らかに強い光を放つ月で、1・4も「朧ろな月」ではないだろう。

これらの他にも月を詠んだ歌はたくさんあるが、平安中期までの歌に詠まれる月は、基本的に夜空に煌々と輝く月の悲哀を感じ、時間と空間を超越した永遠なるものに思いを馳せていたと考えられる。

平安中期までの和歌で「朧ろな月」が詠まれた例としては、かろうじて以下のような歌を見ることができ

(ア) 誰となくおぼろに見えし月影にわけける心と思ひ知ら  
なむ

(後撰集・恋三737「藤壺の人々月夜にありきけるを見て、一人がもとにつかはしける 清正」)

(イ) 秋の夜のおぼろに見ゆる月よりは紅葉の色ぞ照りま  
さりける (躬恒集60「あき」)

(ウ) いつともあはれと思ふを寝ぬる夜の月はおぼろの  
泣く泣くぞ見し (中務集186「夜べの月見けむやと、人のいへるに」)

(エ) 花ならば折りあかしてもありなましおぼろに見ゆる  
春の夜の月 (高遠集102「二月庚申に、女房ど

(オ) いにしへを恋ふる涙にくらされておぼろに見ゆる秋  
の夜の月 (公任集484「九月十五日宮の御念仏始められける夜、遊びなどせられて、月のおぼろなるに、古きことなど思ふ心を人々よみけるに」)

(カ) 空かすみおぼろながらに月影のもるにまさるは夜半  
のけしきか (道濟集241)

(ア)は藤壺の女房の一人に寄せる思いを詠んだもの、(イ)は「朧ろな月よりも紅葉のほうが美しい」という歌、(ウ)(オ)は「涙に曇る月」、(エ)は「花ならばともかく、朧月夜に起き明かす人の気が知れない」とからかったものである。「朧ろな月」が詠まれてはいるものの、「朧ろな月」の風情そのものを主題としていると思われる歌は、(カ)ぐらいのものである。

念のために「かすめる月」の用例も調べてみると、『万